

2009年9月20日 Heidegger Forum 発表原稿

「アジールとしての翻訳：ヘルダーリン「ピンダロス断片」とハイデガー」

西山 達也

20世紀におけるヘルダーリン再発見の運動のなかで「翻訳の問い」が看過しえない役割を果たしたとすれば、それは、再発見の立役者となったノルベルト・フォン・ヘリングラートがヘルダーリンのピンダロス翻訳を再発見し（1909年）、その学位論文においてこの翻訳作業の芸術性格を論じたことが発端にあるからであろう。そもそもヘルダーリンは、生涯に数々の翻訳作業を行っている。まとまった翻訳としてはソフォクレスの『オイディプス王』と『アンティゴネー』およびピンダロスの祝捷歌、そして数多くの短篇の翻訳が知られている<sup>i</sup>。本発表で検討する「ピンダロス断片」は、ヘリングラートがピンダロス祝捷歌とともに発見した翻訳断片群であり、その数は9つある。9つの翻訳断片にはそれぞれ注解が付されており、ヘルダーリン自身によって「知恵の不実」「真理について」「安らいについて」「イルカについて」「至高のもの」「齢い」「無限のもの」「アジール」「生を与えるもの」という題名がつけられている。その数（9という数字は詩神ムーサの数に対応している）、主題、配置、コンパクトにまとめられた注解等、詩人の精密な計算にもとづく構成を窺わせる要素が多く、研究者の間では単なる断片的習作という以上の評価が与えられ、9篇まとめてひとつの作品として「ピンダロス断片」と呼ばれている。この翻訳・注解が作成された時期は、ピンダロス祝捷歌より後、ソフォクレスの悲劇の翻訳・注解作業と同時期あるいは直後の時期（1803-05年頃）と推定されており、成立年代においてもヘルダーリンによる一連の翻訳作業の最終到達点をなすものである。

ピンダロス断片がヘリングラートによってシュトゥットガルト州立図書館のヘルダーリン草稿群のなかから「発見」されたのは1909年のことである（9篇の断片のなかから「アジール」と「生を与えるもの」の2篇）。翌年、祝捷歌の翻訳とともにシュテファン・ゲオルゲのサークルが発行していた「芸術草紙」叢書の一冊として刊行された。その後、1913年のヘリングラートが編集した歴史校訂版全集の第5巻（Übersetzungen und Briefe）にて、ピンダロス翻訳、ソフォクレス翻訳および注解としてまとめて刊行され（上記2篇のみ）、1923年の第2版には9篇がすべて収められた。ヘルダーリンのピンダロス翻訳は、ヴィルヘルム・ミヒェルやギュンター・ツントツ、フリードリヒ・バイスナーといった研究者から注目を集めただけでなく、若き日のヴァルター・ベンヤミンなども熱狂させた<sup>ii</sup>。

このような受容の歴史のなかで、いわば周回遅れでヘルダーリン再発見を引き受けることになったのがハイデガーである<sup>iii</sup>。ハイデガーは1934/35年の講義よりヘルダーリン読解を開始し、1936年のローマでの講演「ヘルダーリンと詩作の本質」、1939-40年の講演「あたかも祝いの日に……」を発表、1941/42年度の講義では冬・夏学期続けて「追想」および「イスター」を読解

する。この一連の作業の中から、本発表で扱うのは1942年夏学期の『イスター講義』であるが、この講義は、中心部（第二部）でヘルダーリンの翻訳したソフォクレス「アンティゴネー」の合唱歌を検討するなど、ヘルダーリンにおける翻訳の問いに最も接近した講義といえる。本発表では、この講義の第1部で、「イスター」という「流れ」のモチーフを論じながら、ハイデガーがピンダロス断片のひとつ「アジール」に言及している箇所に着目する。それは、イスター讃歌における「流れ」と「滞在」という準メタファー的な概念——ハイデガーは流れをメタファーとして受け取ることを拒絶する——を注釈している次のようなくだりにおいてである。

イスター讃歌の言葉（詩句15行）によれば、「ここでしかし我々は建てよう」とあり、流れは人間が地上で住まう場を規定するのである。「住まう」とは、技術的・実用的に見た場合、なんらか宿泊居住というものを所有する（*Innehaben*）ことである。そうしたことは確かに住まうことに所属してはいるものの、住まうことの本質を充足しないし基礎付けるわけではない。住まうとはある滞在を受け取ることであり、滞在の踏み止まりなのである（*Das Wohnen nimmt einen Aufenthalt und ist ein Innehalten des Aufenthaltes*）。しかもそれは人間がこの地上に滞在するの意である。滞在とは滞留（*Verweilen*）であり、時の間を過ごすことである。それは間（*Weile*）を要する。この時の間において人間は安らい（*Ruhe*）を見出すのである。その際、安らいは活動の停止を言うのではなく、妨害の脱落を意味するのでもない。安らいは自己の本質の恒常性にもとづけられた安定である。そのような安らいにおいて、人間の本質はその損なわれぬ姿のうちに保管されているのである。ひとつの場所の傷つけることができず神聖なることをギリシア語では  $\eta \alpha\sigma\upsilon\lambda\acute{\iota}\alpha$  という。ヘルダーリンは、「アジール」について語っている（V, 271）。それは人間の安らいの場（*Ruhestätte*）である。

(…) 「ここでしかし我々は建てよう」とあるが、こことは、流れのほitoriである。  
(GA 53, p. 23)

ハイデガーにとって「建てる」と「住まう」ことは同義であり、滞在を受け取り、あるいは滞在それ自体が踏み止まること（*Innehalten*）——居住施設を所有すること（*Innehaben*）とは異なる——は、移行的本質をもっている（本発表後半を参照）。この滞在の本質の神聖性を言い表すために、ヘルダーリンの「アジール」断片が引き合いに出されるのである。

それにしても、ここでの「アジール」の登場の仕方は唐突な印象を受ける。そもそも、ハイデガーがここで提示しているギリシア語の「アシュリア」は完全な勇み足であって、ヘルダーリンが翻訳しているピンダロスのテキストでは「アシュリア」というギリシア語はまったく用いられていない。とはいえ「アシュリア」が、「 $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$ 」と同じ剥奪・欠如の接頭辞（ $\alpha$ -）

を含んでいるため、ここでもその原義を強調せずにはいられなかったという事情もあろう。逃亡者を匿う場所としてのアジールの性格は、真理の秘匿的・庇護的性格と通じる。いずれにせよ、ここでは「拉し去る」流れ（「アジール」の語源となっているギリシア語の ἄσυλον は、拉すること（συλλάω）を逃れるの意である）と、そのほitoriでの滞在＝アジールの不可侵性とあいだの密接な緊張関係が問題になっている。「滞在」を「アジール」と言い替えることで、ハイデガーは詩人ヘルダーリンのなかに（秘匿的に）隠れ住む翻訳者ヘルダーリンの姿を露呈させようとしていると言ってもよい。

ハイデガーがこのような形で導入しているアジール断片とは、いったいどのような断片なのか。この断片を含むピンダロス断片がハイデガーに対して突きつけた翻訳の問いとはいかなるものであったのか。本論では、（1）ヘルダーリンのアジール構想とハイデガーによるその書き換えの問題、また同時に、（2）アジールという主題を通して翻訳とは何であるか、翻訳者はいかなる使命を負うか、といった問いを逆照射したい。

## I 「アジール」

『イスター講義』で言及されている「アジール (Die Asyle)」と題された断片——アジール断片と略す——は、ピンダロスの断片<sup>iv</sup>の翻訳とそこに付された注解からなる。ハイデガーが参照したヘリングラート版の全集（第二版、1923年）では、この断片は9つのピンダロス断片のうちの冒頭に置かれている<sup>v</sup>。

### アジール

はじめに

よき助言者テミスを

天上の者たちは、黄金の馬にのって

オケアノスの塩のかたわらを通り

時たちは、

オリュンポスの聖なる梯子へと

輝かしい還帰へと、導いた、

救い主ゼウスの

年古りた娘となるために。

善良なる彼女は、だが、

黄金に縁取られた、輝く果実をみのらせた安らいの場を産んだ<sup>vi</sup>。

テミスの息子である人間が、いかにして自己を定位するのか。その精神は、完全なものを求める感覚ゆえに、地上にも天上にも安らいを見出せなかったが、ついに、古えの規律の痕跡をよすがに、運命のうちで神と人間とは出会い、ふたたび互いを認め、根源における困窮を想起しながら、人間は自己を保つことができる場所で喜ぶ。

秩序を愛するテミスは、人間のアジールを、静寂なる安らいの場を、産んだ。そのなかにはいかなる余所ものも立ち入ることはできない。なぜなら、そこでは自然の働きと生が集中しており、また、安らいの場を取り巻く感知するものが、かつて安らいの場が経験したのと同じことを、想起しつつ、経験するからである<sup>vii</sup>。

アジールという主題は、『ヒューペリオン』の執筆当時から、隠遁や隠れ家というかたちでヘルダーリンの関心の中心にあった。また、詩人が生きた時代、特にフランス革命後の歴史的・政治的状況下では、狭い意味での亡命作家に限らず、いわゆる内的亡命を含めたアジールの問題は詩人たちにとって差し迫った問題として受け止められていた<sup>viii</sup>。「アジール断片」では、ヘルダーリンはピンダロスの断片を独自の仕方でも再構成し、神話的な知恵に新たな息吹を注ぎ込んでいる。

## I - 1 何が翻訳されているのか

ヘルダーリンが「アジール断片」で翻訳しているのは、ひとつの神話的な系譜である。そこではギリシア神話の最高神ゼウスとテミスとの婚姻のエピソードが歌われている。ゼウスはティターン神族との戦いの終結後、数々の婚姻を通じてオリュンポス中心の新秩序を形成するに到るが、ピンダロスによれば、この最初のものがテミスとの婚姻である<sup>ix</sup>。ヘシオドスの『神統記』はゼウスの第一の妻をメティス（思慮と術策の女神）としているのに対し、ピンダロスはメティスを省略し、古い神々であるティターン神族に属するテミスをまずゼウスと婚姻させ、新しい法と秩序の助言者とした<sup>x</sup>。この婚姻の結果、ヘシオドスによれば、モイライ（運命の必然の三女神）とホーライ（法と正義の三女神）が生まれる。これに対し、ピンダロスはモイライをテミスの娘とはせず、テミスがゼウスによって召喚される際の付き人としている。ピンダロスの讃歌は、ヘシオドスが作成した神々の系譜を書き換え（そうすることで神々の系譜を作成する時代の終焉を宣告し）、神々の系譜を讃えるという様式を完成させた。したがってヘルダーリンにとってピンダロスを翻訳することは、すでに書き換えられた神話をさらに書き換えるとは言わないまでも、神話の翻訳の課題を引き継ぐことを意味していた。ちなみにピンダロ

スの断片でテミスは「よき助言者」と言われているが、ここでの助言とは神託言語のことである。ガイアの娘であるテミスは、大地の力を背景としてデルポイの神託の術をアポロンに授けたとされる<sup>xi</sup>。こうした至聖所の起源の挿話がヘルダーリンにアジールの起源を連想させたと考えられる。

## I - 2 「神話をより具体的なものとして描出する」

翻訳部は二つのパートに分かれる。前半は、テミスがホーライに連れられてオリュンポスの梯子まで導かれるというもの。後半は、「だが」という逆接で前半に接続し、テミスが「安らいの場」を産んだ、としている。

翻訳部を一瞥しただけでもいくつかの奇妙な点が露呈する。まず、ピンダロスの断片はテミスがゼウスとの「婚姻」の場面を歌っているのに、ヘルダーリンの翻訳では、テミスがゼウスの「年古りた娘 (alte Tochter) になる」と言われている、というプロットの書き換えがある。また、神々の名の固有名詞も消えている。ピンダロスの原文でテミスに付き随ったモイライ (運命の必然をつかさどる三女神) と、テミスが婚姻の後に出産したホーライである。前者はヘルダーリンの翻訳では「時たち (die Zeiten)」と訳されている。また、ホーライは、季節 (時の配分) と正義をつかさどる三女神で (エウノミア、ディケー、エイレネ)、ヘルダーリンの翻訳では「安らいの場 (Ruhstätte)」と訳されている。これは、ヘルダーリン自身が行っているように「神話をより具体的なものとして描出する」<sup>xii</sup> という原則に則ったことであろう。

アジール断片の最大の謎はホーライという名の翻訳にある。なぜテミスとゼウスの婚姻の結果が「安らいの場」すなわち「アジール」の創出へと書き換えられねばならないか。神話学的・文化史的な観点から言えば、古代ギリシアのアシュリアにおいて、他のポリスからの逃亡者は神聖な場所 (神殿や祭壇) に触れることで、追っ手の捕縛から逃れることが出来たが——「嘆願」制度という——、こうした嘆願者たちを庇護する神がテミスであった。アイスキュロスの悲劇「救いを求める女たち」では、まさに「嘆願者たちの庇護者テミス」が「ゼウスの娘」と呼ばれているのである<sup>xiii</sup>。こうした嘆願制度にヘルダーリンが関心を寄せていたことは明らかである。『ヒューペリオン』第2部末尾の書簡が「コロノスのオイディプス」に言及していたことも想起されよう<sup>xiv</sup>

だが、こうした神話的背景へのヘルダーリンの関心だけでは「ホーライ」を「安らいの場」とする「恣意的な」<sup>xv</sup> 翻訳の理由説明にはなっていない。ヘルダーリン研究者であるアルブレヒト・ザイフェルトは、そのアジール断片に関する研究書において、「安らいの場」という翻訳が導き出されるプロセスに着目している<sup>xvi</sup>。彼によれば、そもそもこの箇所は、現行のいずれの版でも「テミスが真実なるホーライを生んだ (τίκτεν ἀλαθείας ὥρας)」という読みが採用

されているが、ヘルダーリンが所持していたとされる版（1560年のステファヌス版第2版）では、「善良なるテミスが救済者たちを生んだ（τίκτεν ἀγαθὰ σωτήρας）」と記されているのである。したがってヘルダーリンはこの箇所ですべて恣意的な訳を当てているというわけではないことになる。

さらにザイフェルトの解釈によれば、ヘルダーリンが「救済者たち」という語の上に「ホーライ」の意味を重ねて読み込んだうえで、「安らいの場」＝「アジール」という発想を得たというのである。というのも、ヘルダーリンの用いたステファヌス版はギリシア語とラテン語の対訳であり、その翻訳部分では、「テミスが善きホーライを生んだ（peperit bonas Horas）」というラテン語訳が採用されているのだ。そして、この断片の下に編訳者であるステファヌスの注記が付されており、「この翻訳においてはἀγαθὰ σωτήραςではなくἀγαθὰς ὥραςと読む」と述べられているのだ。このラテン語とギリシア語の対訳テキスト、そして訳注を前にして、ヘルダーリンは、表面上はギリシア語原文の「救済者（σωτήρ）」を選択しながら、「ホーライ」の可能性を捨てずに迷ったうえで「安らいの場（Ruhestätten）」という奇妙な訳を提案したものである。もし迷いが生じていなければ、テミスがゼウスという救済者（σωτήρ）と婚姻し、「救済者たちを（σωτήρας）産んだ」という翻訳になるはずだ。例えば「安らいの場」を修飾する二つの形容詞の翻訳では、goldgeheftetenとglänzendbefruchtetenのように、すでに「黄金の馬車」と「輝かしい帰還」のなかで用いられているのと同じ形容詞を反復している。ピンドロスの断片のなかですでにこれらの形容詞（「黄金の」と「輝かしい」）の反復が見られるのだが、ヘルダーリンはそれを訳し変えずに忠実に置き換えているのである。こうした翻訳は冗漫な印象を与えかねないが、逆にヘルダーリンは、ここにある種の翻訳の法則を、すなわち同じものの反復の法則を見出していた可能性がある（これに関しては注釈部末尾で詳述する）。そのうえで、ἀγαθὰ σωτήραςとἀγαθὰς ὥραςという二重のオリジナルの可能性が呈示されたとき、ヘルダーリンは二つの解釈可能性を前にしてどちらも保存するつまり、ともに救済するという戦略をとったのではないだろうか。この二重保存翻訳の戦略は、通常の翻訳ではありえないし、ましてや文献校訂や解釈としての論外である。まさに翻訳者としてのヘルダーリンゆえに為しえた意味保存の戦略なのだ。

善良なる彼女は、だが、黄金に縁取られた、輝く果実をみのらせた安らいの場を産んだ。

Sie aber hat

Die goldgehefteten, die gute,

Die glänzendbefruchteten Ruhestätten geboren.

「彼女は」の後につづく「だが」が示す逆接は、しかし、何と何が対立しているのかを判然

とさせない。ただ、その対抗的な強度によって「goldgehefteten」と「glänzendbefruchteten」という二つの長たらしい形容詞と「安らいの場 (Ruhestätte)」という訳語のもつ緊張感を増幅させているように思われる<sup>xvii</sup>。

### I - 3 翻訳と注釈

アジール断片の注釈部においては、「アジール」すなわち「安らいの場」と呼ばれているものが、次々とパラフレーズ（再翻訳）されてゆく。

#### (A) テミスの息子としての「人間」

「安らいの場」は、注解部前半では、まず、「人間たちが自己を定位する」場としてパラフレーズされる<sup>xviii</sup>。人間はテミスの子供と言われる。これは両者がアナロジックな関係にあるということを意味する。テミスとゼウスの婚姻というモチーフが、注釈部では、人間と神との遭遇のモチーフへと変奏されるのである。その際に、両者の媒介となっているのが、テミスの体現する「法」である。自身が法と正義をつかさどるとともに、テミスは、法の三女神ホーライ（ディケー：正義、エイレネ：平和、エウノミア：公正）を生む<sup>xix</sup>。

「法」は、人間たちにアジール権を保証するところのものであると同時に、ピンダロス断片全体を貫く主要テーマである。「至高なるもの (Das Höchste)」では、プラトン以来よく知られた「ノモス・バシレウス」（法こそが王）というピンダロスの断片が注釈されている。また、アジール断片のキーワードでもある「安らい」を題名とした断片「安らいについて」では、「法」が「王者の風格をもつ安らいの聖なる光」と言い換えられている。ピンダロス断片のテキスト全体において「法」の主題がテキストの重層性を担保している。「法」といっても、それは「至高なるもの」が示しているように、「至高の認識根拠」であり、つまり認識を基礎付ける媒介作用である。アジール断片でも、ヘルダーリンは、法を認識根拠としつつ、神と人間が「遭遇」しうることを、そしてふたたび相互の領域を区別されたものとして認識しうることを、示している。それとともに、「認識する (Erkennen)」ことの旧約聖書的な意味、すなわち性的に知ること（ゼウスとテミスの同衾）を読み取ることも可能である。自己再帰性と相互性がこの散文的テキストに特異なリズムを提供している (sich setzen、sich begegnen、sich wiedererkennen、sich halten)。

#### (B) 規律の問題

ついに、古えの規律の痕跡をよすがに、運命のうちで神と人間とは出会い、ふたたび

互いを認め、根源における困窮を想起しながら、人間は自己を保つことができるところで喜ぶ。

bis sich im Schicksal belegend, an den Spuren der alten Zucht, der Gott und der Mensch sich wiedererkennt, und in Erinnerung ursprünglicher Not froh ist *da, wo er sich halten kann*.

ピンドロス断片においては法は至高の認識根拠であるのだが、ここで言われている「古えの規律の痕跡をよすがに (an den Spuren der alten Zucht)」は少し奇妙な表現である。これはヘルダーリンの別の草稿のなかでも自己引用されている文言であり<sup>x</sup>、何かヘルダーリンにとって意味を持っていた表現であるのは事実なのだが、ヘルダーリン研究者のあいだでも扱いが困難として持て余されている。まずもってZuchtは規律ないし紀律の意味でここでは理解すべきだし、ヘルダーリンも「至高なるもの」のなかで言っているように、「規律」は、「人間と神とが出会う形態 (Gestalt)」であって、それらは「教会や国家の法、伝承された取り決め」などと並置されている。とはいえ、ここで「古えの」規律とはどういう時間に属する規律なのだろうか。翻訳部のそれは通常の法より根源的な自然法ないし「太古の法」の意味で理解すべきなのだろうか。altという形容詞は翻訳部ではテミスを形容していた（「年ふりた娘」）し、ピンドロス断片の他の断片では「齢い (Das Alter)」が主題になっていた。

これに関して、前出のザイフェルトは、この「規律の痕跡」をプロメテウス神話に結びつけ、太古の神人遭遇によって生じた傷跡の痕跡を具体的に示しているという大胆な仮説を提示している。ローマの詩人カトゥルスが、解放後のプロメテウスがゼウスの驚に肝臓を啄ばまれた際の傷跡を形容する際に、「その身体にはいまだに古えの懲罰の色褪せた傷跡があった」<sup>xii</sup>と言っているのだが、これをヘルダーリンが念頭においていた可能性が十分にあるというのである。Zuchtは、この場合、規律や秩序の意味ではなく、むしろ懲罰・訓育（ラテン語のdisciplina）、動詞Züchtigen（折檻する）とZüchten（飼育する）をあわせた意味でとるべきところなのだ。説得的かどうかはともかく、プロメテウスの傷跡と、神人遭遇の反復性への関連付けはきわめて魅力的な説である。肝臓の規則的な再生と、それにとまなう驚の襲来の反復、この傷跡 (Spur) は、要するに、反復のしるし、あるいは反復するしるしそのものなのだ。根源の想起と神人の再認は、この「痕跡をよすがに」遂行される。

きわめつけにザイフェルトは、「彼が自己を保つことのできるところで (da, wo er sich halten kann)」という副文に「an den Spuren der alten Zucht」を掛けて読む。とすると、「人間が自分を保つことができる」という文が反転し、「彼が古えの規律（訓育・懲罰）の痕跡（記憶）を頼りにすることができる」という意味になるのである。これはまさに、ヘルダーリンがこのピンドロス断片全体にわたって張り巡らせている「Halt」関連の語彙にもリンクするものであ

る。「至高なるもの」では、「教会や国家の法、伝承された取り決め」が「生き生きした関係を確保する (sie halten [...] die lebendigen Verhältnisse fest)」とされている。Haltの意味に関しては、ハイデガーにおけるAufenthaltへの書き換えをめぐって再度立ち戻らねばならない。

かくして「安らいの場」は「人間が自己を保つことができる場」へとパラフレーズされたわけだが、注解部の後半ではさらにこのパラフレーズが進展する。

### (C) 同じものの反復

注釈部の後半部は、前半部に引き続いて「安らいの場」「人間が自己を保つことのできるところ」という語句のパラフレーズがおこなわれている。

秩序を愛するテミスは、人間のアジールを、静寂なる安らいの場を、産んだ。そのなかにはいかなる余所ものも立ち入ることはできない。なぜなら、そこでは自然の働きと生が集中しており (←副文1)、また、安らいの場を取り巻く感知するものが、かつて安らいの場が経験したのと同じことを、想起しつつ、経験するからである (←副文2)。

Themis, die ordnungsliebende, hat die *Asyle des Menschen*, die stillen Ruhestätten, geboren, denen nichts Fremdes ankann, weil an ihnen das Wirken und das Leben der Natur sich konzentrierte, und ein Ahnendes um sie, wie erinnernd, dasselbige erfähret, das sie vormalis erfuhren.

「そこにはいかなる余所ものも立ち入ることはできない」の理由を説明する副文2つが問題である。第一の副文はまだ分かりやすい。「離心的な軌道」というヘルダーリン独特の考え方を踏まえれば、自然の力と働きの「集中」とは、自然的な生が集中して法の形態を獲得する過程を表現していると理解できる<sup>xiii</sup>。だが二つ目の副文においては、まず、「ein Ahnendes um sie」の前置詞umの用法とsieの指示対象が問題である。後で見るようにハイデガーは「um」を空間的意味でとり、「sie」を「人間たち」ととっているが、後者に関してはRuhestättenを受けているとみなす研究者が多い。ein Ahnendes um sieもしくはein um sie Ahnendes——「それら (= 安らいの場) を予感・感知するもの」もしくは「それらを取り巻く予感・感知するもの」——という文言は、アジールが境域である以上、それを取り囲む (um) もの、すなわちアジールで安らいを生じさせるためのシェルターのようなものがあると考え、空間的な意味で訳した。感知するもの (ein Ahnendes: 「予感」は必ずしも未来を先取りすることを意味しない) とは、アジールを庇護するシェルターであるとともに余所なる者との遭遇の媒質であり——ヘルダーリンが「Geist (精神ないし霊)」と呼ぶもの——、それがあってはじめて異なった領域の隣接

が可能となる、つまり「厳密な媒介性」（「至高なるもの」）が可能となる。したがって想起しながら感知するものは、ヘルダーリンの語彙でいえば「法」である。「安らいについて」と題された断片では、次のように言われている。

法は、あの運命を平静のなかでしっかり保持するための手段となる（Dann sind die Gesetze die Mittel, jenes Schicksal in seiner Ungestörtheit festzuhalten）。

運命に従って、「感知するもの」は、かつて安らいの場にて生じたのと「同じこと（dasselbige）」を再帰的に経験する。安らいの場においては、厳密に同じことが反復するので、そのなかで「人間は自己を保つ」ことができ、また、「余所のものが立ち入ることができない」のである。

したがって、「余所のものが立ち入ることができない」は、異他性を排除しているのではなく、むしろ認識の純粋性を保つことで混じりけのない翻訳を可能にしていると考えられることができる。同じことの経験は、意味の同一性であれ、形式の同一性であれ、翻訳のミニマルな条件といえよう。翻訳部で2回ずつ繰り返される同じ形容詞、「黄金の」と「光り輝く」は、聖性の伝達を、つまり翻訳を象徴しているように思われる。また、翻訳部末尾の（ホーライに代置される）「救済者」も、父である救済者ゼウスを反復したものだ。テミスは救済者の「娘」になり、救済者たちを産む。「同じこと」の保存、ギリシア語でいえば「ソテリア」は、まさに「救済者」の機能そのものである。その意味で、「同じこと」を繰り返す人間、「自己を保つことができるところで喜ぶ」人間は、まさしく翻訳者の形象を言い表しているのである。

## II 滞在

以上にアジュール断片を仔細に検討してきたが、この断片を含むピンダロス断片について、ハイデガーは幾つかの重要な箇所を参照している。講演「あたかも祝いの日に……」（1939-40年）と、講演「追想」（1943年）では「至高なるもの」を参照し、また、講義『ヘルダーリンの讃歌「ゲルマニア」と「ライン」』（1934/35年）では「生を与えるもの」を全文引用している。「生を与えるもの」のなかから抜粋された「流れの精神（Stromgeist）」という言葉は、ヘルダーリンの詩作全体の、あるいはヘルダーリンによって詩作された詩的精神のエンブレムとなる<sup>xiii</sup>。冒頭で確認した『イスター講義』からの引用、そのなかで「アジュール断片」への言及がなされている箇所も、「イスター」における「流れ」の意義を解明している箇所においてであった。アジュールは、流れのほとりに創設される。

「ここでしかし我々は建てよう」とあるが、こことは、流れのほとりである。（GA

この創設行為は、ハイデガーにとって、同時に翻訳ないし解釈の創設であることを忘れてはならない。『イスター講義』第3節では「流れ」をメタファーと解することを芸術の形而上学的解釈として厳しく拒絶しているが、これは逆説的に、「流れ」がメタファー (metaphora) の転移的性格 (-phora) に対するメタ・メタファー、あるいはより正確には、「メタ」抜きの「フォラ」となっているからである。こうしたメタ言語に対する拒絶は、この講義でのハイデガーの「翻訳」への関心をあらためて反映している。「流れのほとり」とは、こうしたメタ言語の拒絶に即して、つまり「フォラ」の移動に即して、を意味する。そしてまさにここで、翻訳としてのアジールが創設される。ハイデガーはピンダロス断片翻訳についての覚書(1944年執筆、2001年刊行)のなかで次のように述べている。

翻訳とは、彼方へ移すことであり、他の岸へと、他なる者の岸に向けて、渡すことである(したがって解釈を前提としつつ移すことである)。

Über-setzen – auf ein anderes Ufer – an das Ufer eines Anderen !! (Demgemäß :  
Voraussetzung der Auslegung. (GA 75, p. 343)

ハイデガーのヘルダーリン読解は、彼の解釈学的な関心を背景として読まねばならない。だが同時に、ハイデガーはピンダロス断片を前にして解釈学的な関心を強く揺さぶられているのも事実である。「ヘルダーリンによってこれらの断片に添えられているもののみが問題である」(GA 75, p. 342)。「この「追記」は何か、「解明」か、「注釈」か？」(p. 342)。ハイデガーにとって、ピンダロス断片の翻訳が範例的であったとすれば、それはピンダロス断片において、解釈と翻訳の関係の究極の形態、あるいは解釈の究極の形態としての翻訳<sup>xiv</sup>がその姿を露わにしているからである。

こうした前提から出発して、ハイデガーがどのようにアジール断片から想を得つつ「流れのほとりでの滞在」の主題を展開しているのかを確認したい。

## II - 1 到来

「アジール断片」についてのハイデガーの言及箇所は本発表の冒頭で引用したが、その続きを確認することからはじめたい。

ひとつの場所の傷つけることができず神聖なることをギリシア語ではヘ・アシュリアという。ヘルダーリンは、「アジール (Die Asyle)」について語っている (V, 271)。それは人間の安らいの場である。だがそれは必ずしも墓所ではない。むしろ自然の働

きと生気が「集中する」場所、「予感するもの」が人間をめぐって来る (» ein Ahnendes « um den Menschen kommt) 場所である。そのような場所がかの滞在を規定する仕方、総じて場所が場所たるありようを、我々は場所の場所たるゆえんとして、所在 (Ortschaft) とよぶ。場所のかかる所在が、滞在の安らいを施し与えるのである。「ここでしかし我々は建てよう」とあるが、こことは、流れのほitoriである。

流れは、人間の地上における滞在を遍く宰領する所在として「存在する」。この所在が人間を、その所属する方へと、また人間が故郷をえて休らう (heimisch ist) 場へと、規定している〔情調づけている〕。流れはこうして人間をその固有のものへともたらし、人間をその固有のものにおいて保つのである。(GA 53, p. 23)

これだけの短い言及からではあるが、ハイデガーのヘルダーリン読解のいくつかの特徴を抜き出してみたい。

- (i) ハイデガーにおける「神話」
- (ii) ein Ahnendes : 到来の次元
- (iii) Halt関連語彙

まず (i) に関しては、端的に、アジール断片のなかで言及されていたテミスとゼウスの婚姻という神話的モチーフへの言及がまったく欠如している<sup>xxv</sup>。もちろん当該箇所は「イスター」の読解であるので、それと直接関係ないゼウスやテミスへの言及は不要であろう。一方、「イスター」が依拠している神話的モチーフ、すなわちヘラクレスによるイストロス川上流での滞在(そこでの「オリーブの木蔭の獲得」)については「異邦の者の歓待」の主題として言及がある(第23節)<sup>xxvi</sup>。ヘラクレスのモチーフは「流れの精神」と関連付けられるディオニュソス神話と一体とみなしうるが<sup>xxvii</sup>、『イスター講義』ではディオニュソスについては議論を展開していない。この点に関しては (ii) とセットで考えねばならない。

もっとも、ハイデガーはそもそもロゴスとミュトスとを対立的には捉えておらず、原言語 (Ursprache) と原詩作 (Urdichtung) を神話と一致させる。その場合、34/35年講義と講演「あたかも祝いの日に……」においては歌の誕生に比せられる「半神としての詩人」(ディオニュソス)の生誕の論理を究明することがハイデガーにとっての神話(論)的なものの解明を意味することになる<sup>xxviii</sup>。

次に (ii) に関して。ハイデガーはここで ein Ahnendes um sie を「人間たちを取り巻く予感するもの」と読み、「流れの精神」に結び付けて理解しようとしている。このとき、「予感するもの」は到来の次元を指し示している。1934/35年講義では、「流れの精神」はディオニュソス神話と「来たるべき神」のモチーフにはっきりと置き換えられているが(ディオニュソス

こそが来たるべき神である〔Cf. W・F・オットー〕）、『イスター講義』ではディオニュソス神話への参照がなされていない。ハイデガーはヘルダーリンの詩「民の声」における「予感に満てる者ら」という表現に注目しているが、それは次のような詩節のなかに見出される。

われらの知恵など顧みることなく  
流れはしかしざわめきの音立ててゆく。しかもなお  
何びとが流れを愛さぬであろう。それは常に  
私の心を動かすのだ、遙かの方へ消え去りゆく  
予感に満てるものらの響きを聞くとき。私の道とはいえぬながら  
より確かな道を取り、流れは大海へと急ぎ行くのだ。　（民の声、GA 53, p. 32）

「流れの精神」は、人間に対して無関心であるにもかかわらず、「私の心を動かす」、つまり「情調づける (bestimmen)」。流れと人間とのあいだに「愛」の情調が存在する。その情調の座は「離心的な中心」（『イスター講義』の主要関心でもある心=Herz、炉=Herd、大地=Erde）であり、引きさらう流れと、離心的な心と、そして予感はいずれ独自の「牽引」作用をもっている。

しかもなお、何びとが流れを愛さぬであろう……

だからしかし流れへの何らかの帰属性はやはりあるわけである。流れと共に行こうとする心である。流れの持つ引きさらう勢いと、そして自らの道を行く確かさとは、これこそまさに、人間をその生の通常を中心よりして引き出すところのものであり、かくして人間は彼の生の外部なる一中心点 (Zentrum) に立ちうる、すなわち離心的=常軌を逸脱したるものでありうる。人間的存在の離心的中心が踏み止まること (Das Innehalten der exzentrischen Mitte des menschlichen Seins)、この中心をそれたるものにおいて自らの「中心を得て」「集中して」滞在するということ、これはその前段階を、愛においてもつのである。生の離心的中心において立つという場合、その本来の領域は、死である。消え去りゆく、予感に満てる流れは、人間の道を行きはしない。(p. 32-33)

この箇所はまさしくアジール断片注釈部への注記として読むことができる。場所としてのアジールが、ここでは、として説明されている。アジール断片では「自然の活動と生が集中する」といわれていたが、ここでは人間の生の離心的な中心における滞在が言われている。人間の「心」は、流れの精神によって引きさらわれる。この「引き裂く流れ」は、(i) で述べたディオニュ

ソスのもの——到来する神——の本質特徴でもある。もっとも、ハイデガーはここでは予感と到来を等置しておらず、むしろここでの「予感」を想起の次元へと結び付けている。「真の追憶はひとつの予感である。おそらくは追憶とは、単になんらか来るものへと予測をめぐらせる態の予感以上に、より根源的な予感であろう」（p. 34）。こうした想起しつつの予感のうちに自己を保持することを、ハイデガーはここでは、「人間的存在の離心的中心が踏み止まること（Das Innehalten der exzentrischen Mitte des menschlichen Seins）」と表現している。

Innehalten（踏み止まること）と予感とは矛盾しない。踏み止まること、堅持することは、独特の牽引の力をともなう。1944年に執筆された覚書きのなかでハイデガーは、アジール断片における「古えの規律の痕跡をよすがに」という文言について、牽引の即面から次のように注釈している。

この「法」は規律として。ピンダロス断片（ただし懲罰の鞭にはあらず）。「古き規律」とその痕跡（…）。

規律は（Zucht=Zug=Zügel）牽引であり手綱であって本質的な諸関係を、導く手綱のうちに堅持することとしての躰けである。媒介しつつ、中間を形成しつつ、しっかり保持しつつ、このようにして留まるものに帰属しつつ、癒す、の意である——（聖なるもの）。（GA 75, p. 320）

発表前半ではヘルダーリンの「規律（Zucht）」が「懲罰（Züchtigung）」の意味を含むと述べたが、ハイデガーはここではそれを明確に否定している。ハイデガーはむしろ「規律」を「牽引（Zug）」に結び付け<sup>xxix</sup>、手綱をしっかりと握る（festhalten）媒介者として身を持つ者（とはいえ「導き手」の構え（Haltung）そのものには言及がないが）の性格を強調している。「想起しつつ予感するもの」は、こうした「牽引」のうちに身を持つ（sich halten）<sup>xxx</sup>。

ここから、(iii) Halt関連語彙を考察せねばならない。Haltの関連語彙は後期ヘルダーリンが好んで用いた語彙であり、また、ハイデガーもこの語彙をふんだんに用いてヘルダーリンの詩作を讀解し、なおかつ、自らの思索のうちでこの語彙を増殖させていった。この語彙は元々ハイデガーの使用に供されていたが、30年代から40年代の講義を通じてヘルダーリンの用法によって侵食され、最終的にAufenthaltという語のうちに結晶化することになる。アジール断片における「自己を保つ」に関しては、ハイデガーは、ピンダロス断片への未発表の覚書きで、「人間が自己を保つことができる場所で喜ぶ」のはいつか」という問いを立てている（GA 75, p. 346）。この「いつか」という問いは、(ii)における予感の時間性の問いに結びついている。「人間的存在の離心的中心の踏み止まり」という表現のなかで用いられていたInnehaltenという動詞（持続であると同時に遵守、また反対に中断・停止も意味する）は、この答えとなる時間性を含んでいる。本発表の冒頭で引用した『イスター講義』の一節でも、「滞在」と

Innehaltenが互いにどちらが主体となるともなく相互に規定しあっていた。「住まうとは（…）滞在の踏み止まり（Das Wohnen [...] ist ein Innehalten des Aufenthaltes）」。滞在は、自らのうちに立ち止まり、離心的なもの（ent-）を内包（enthalten）しつつ自己を保持する。この自己の保持は、想起しつつの予感という「牽引」のうちにある。これについて、Innehaltenの時間性をさらに検討したい。

## II - 2 移行の時間

### (A) 停止

ハイデガーが考えた「滞在」の場——固有なものと異質なものとの一時的な対話が生起する場——では移行の時間が支配する。1941/42年冬学期の講義でハイデガーは、こうした時間をヘルダーリンの「追想」の読解から導き出す。この詩が題材としている1801-02年のボルドー滞在の記憶そのものが、詩人の生における移行の時間の記憶を記しているのだが、そこで歌われている季節も「夜と昼が等しいとき」、すなわち三月、春分という時間である。「移り行くことは、むしろ過ぎ去り行くこと、単に通り過ぎること、滞在することではないと思われる。しかし三月の時期には、急を要することも、荒々しいこともない。隠れて中断（Innehalten）しているなかで冬と夏の宥和が兆している。だがこの中断は静止状態ではなく、独特の上昇であり……」（GA 4, p. 109）。それはまた、祝祭の時間、より散文的に言えば休暇の時間である。休暇とは、日常業務と労働を停止することなのだが、これは労働のための休息（「労働の絶対的優位」のもとでの「休日の制度化」：GA 52, p. 65）であってはならない。本来的な停止とは、「自己を引き止めること（Ansichhalten）」である（p. 64）

中止することとしての休むことはしかしまた、単なる中絶・中断であるかわりに、止めてうちに留まるとして、始めることでもありうる。この、内にとどまるは、労働から注意を背けることから生ずるのではなく、人間が自らを保持することに由来するのである。自らを保持するとは、自己 - 自身へと - いたるであって、我に返るであり、自己としてあることである。ここにおいて、自己固有の本質とその展開とが自由を得る（freigegeben）のである。（p. 74）

自己の本質の保持と自由な展開は、まさに「自由な場（Freistätte）」としてのアジールの特徴のひとつである。「祝祭は通常のものから自由となり、免れることである」（p. 65）。

この規定は、哲学の伝統においてはスコレーの規定を想起させるものであり、「停止」の与える自由は、スコレーを遂行する自由人の自由（エレウテリア）と重なりあう。じじつ、初期のアリストテレス読解においてすでに、ハイデガーは配慮的な動性としての「スコレー」を「滞在（Aufenthalt）およびその関連語句によって翻訳していた<sup>xxxi</sup>。「スコレー」は単なる暇では

なく、動性のただなかにおける「滞在」である。ハイデガーの滞在は、あくまで、離心的な中心における滞在なのである。

## (B) 物怖じ

滞在における自由は、ハイデガーにとって、放恣ではなく自己抑制としての自由である。この自己抑制は、時間の留まりと滞りを作り出し、これが「物怖じ (Scheu)」とも言い替えられる。

物怖じは断じて不安定ではない。しかし自らを抑制している (hält doch an sich)。だがこの、畏怖の自己抑制 (An-sichhalten) は、小心翼翼といったように自分自身のための心痛にかまけてしまうわけではない。物怖じの自己抑制はしかし、それにもかかわらず決して留保 (Vorbehalt) ということを知らぬ。物怖じは、怖れられたものを前に根源的に固められた自己抑制として、同時にこの怖れられたものへの最も心籠めた愛好でもある。物怖じへの情調を呼ぶものは、躊躇させる。だがこの物怖じの躊躇いは、萎縮し消沈することをしらぬ。物怖じの躊躇いは、待ちつつ忍耐への決意を固めていることである (die wartende Entschiedenheit zur Geduld)。 (GA 52, p. 171)

別の箇所ではハイデガーは物怖じが決して心理学的なカテゴリーでないと言っているが、これは要するに「自己保持 (Sich-halten)」の様態だということだ<sup>xxxii</sup>。この場合、「物怖じ」(もしくは「畏怖」)が何に対して「自らを保持して/自らを制止して」いるかといえば、それはもはや何らかの他者や疎遠な者に対してではない。「物怖じ=畏怖は、奇異なるものに対する物怖じ=畏怖ではない。ではなくして、物怖じとは、異邦のものにおいて異邦のものとしての輝き始めるところの、固有のものにして遠方から来たる親密なるもの ( vor dem Eigenen und fernher Vertrauten, das im Fremden als dem Fremden zu leuchten beginnt)」これに対するものなのである (GA 52, p. 172)」。固有なものと同質なものとのキアスム的關係、「生き生きとした関係」(「ベーレンドルフ宛書簡」)のうちに自己を保持する者、このような者は大勢いるわけでも滅多にいないわけでもない。「ときおりひとり、またいつかひとり、それがいつも」(GA 52, p. 170)といった具合に存在する者たち<sup>xxxiii</sup>の共同性、これがハイデガーのアジュールにおける共同性である<sup>xxxiv</sup>。

## II - 3 自由な場

こうした自由な場への滞在は、1930-40年代のハイデガーにとって、不可避免的に「ポリス」という場の刻印をおびたものとして思考されている<sup>xxxv</sup>(講演や論文ではオブラートに包むが、講

義ではそうした方向が明確に示される)。これが如実に現れる例としては、Haltに関わる語彙系で、「滞在」や「関係 (Verhältnis)」、「慎ましさ (Verhaltenheit)」と並んで、「構え (Haltung)」という語を忘れてはならない。滞在であろうが、関係であろうが、また、物怖じや停止であろうが、そこにはスタンスがなければならない。そして、このスタンスはそのつど特異な場を要請する。Haltungという語はハイデガーのテキストの随所に見出されるため逆に目立ちにくい。例えば1931/32年冬学期の講義では、この語はプラトン『国家』第7巻の「洞窟の比喩」のなかに出てくる「パイディア」を翻訳するために用いられている<sup>xxxvi</sup>。こうした構えのうちのみ人間が存在者の只中での自由を得る<sup>xxxvii</sup>——洞窟の外への解放、またその反対の、真理のイデア化 (オルトテース化)、すなわち軛への繋留における自由の喪失。だが、1942年に発表された「プラトンの真理論」<sup>xxxviii</sup>では「洞窟」の内外における滞在と方向転換が論じられるものの、「構え」への言及が完全に消失し、「構え」が「滞在」によって置き換えられる。そしてこれと連動して、1931/32年の講義において「構え」が可能にしていた自由が考察の背景にしりぞく<sup>xxxix</sup>。1942年のイスター講義および「プラトンの真理論」では、自由の問題系がむしろ「場所の場所性」における自由な開かれ (das Freie) へと転換されたと考えることができる。

この「構え」から「滞在」への転換と関連していると思われるのは、『イスター講義』の第2部におけるアンティゴネーの形象である。アンティゴネーの形象において問題なのは、その存在の構えであり、また、またポリスにおける滞在の可否だからである。ここでアンティゴネーの「構え」と「滞在」を一語で言い表しているのは、ギリシア語のπέλωという動詞である。πέλωは「存在する」とほぼ同義の語だが、「古く、その意味は、盛んに動く、生じ来る、おのれの場所または場を見出し、踏み止まる (seinen Ort und seine Stätte finden und innehalten) の意である (GA 53, p. 87)」<sup>xl</sup>。この動詞は「不気味なものは数多くあれど」で始まる合唱歌の冒頭で用いられているのだが、この箇所をハイデガーは、次のように翻訳している。

κοῦδέν ἀνθρώπου δεινότερον πέλει·

しかし人間よりも不気味なものはありえない。『アンティゴネー』333-334行  
nichts doch über den Menschen hinaus Unheimlicheres ragend sich regt.

しかし人間を超えて聳え立ち激しく動く、より休らいなきものはない。GA 53, p. 73

「聳え立ち激しく動く (ragend sich regt)」と訳されたπέλωはアンティゴネーを含む人間存在そのものの離心的な構えを言い表している。そしてじつは、このような「構え」をもつことがポリスをもつことと等置される。

おそらくポリスとは、それを回って一切の問いに値するものが、したがって休らいな

きものが、特別な意味において回転しているところの場所なのであり、領域なのである。かかるポリスπόλιςとはポロスπόλοςであり、すなわち極 (Pol) なのである。一切がそこにおいて、またそれを回って旋回している渦なのである。πόλιςとπόλος、この二つの語において、合唱歌第二詩行で動詞πέλειの語っているもの、かの本質的なものが名指されているのである。ペレインとは、恒常的なものにして変転である。  
(p. 101)

ペレイン、ポリス、そしてポロス (極) の連関のうちに、「安らいの場 (Ruhestätte)」が組み込まれる。ヘルダーリンにおいては「自然の生と働きが集中する」場所であったアジールが、「一切がそこにおいて、またそれを回って旋回している渦」となる。アンティゴネーの合唱歌の末尾近くでポリスという語が興味深いかたちで用いられている (ここでハイデガーはポリスを「場 (Stätte)」と訳している)。

... ὑψίπολις· ἄπολις ...

Hochüberragend die Stätte, verlustig der Stätte ist ...

……高く聳え立つその場、その場を失うものは…… (『アンティゴネー』 370行) <sup>xii</sup>

ὑψίπολις (高く聳え立つ場) と ἄπολις (場を失う) の両極は、このようにテキストの上で隣接しながら、ポリスの内包する最大振幅の内向的対抗性を示している。ἄπολιςとは、国を失った者、法外の者、罰せられた者、真にポリスに属さない者、すなわちアンティゴネーという特異な者を指す。だがハイデガーはこれを「高く聳え立つ場を失う者」と翻訳している。そのような者は、「炉のもとで我が親しき者とはなりえぬであろう」「またその者の想いとも、我が知の関わることはよもあるまい」と宣告される (GA 53, p. 120)。だが最終的に、ハイデガーは、このようなアンティゴネーの排斥 (Verwerfen) が反転すると考える。もっとも不気味なものとしての人間のなかで、さらにもっとも不気味なアンティゴネーこそが炉に加わる。「高く聳え立つその場を失う者」(アポリスな者)、滞在の自由を拒絶された者こそが、「開かれた場所」(GA 53, p. 113) に、存在としての「炉」に投じられる <sup>xiii</sup>。

#### 結語 翻訳としてのアジール

翻訳を論じるということは、冗漫さに冗漫さを重ねる作業であるにもかかわらず、多くの翻訳者がみずからの翻訳について語ってきた。それが何故かといえば、翻訳行為とはつねに何らかの形で聖なるテキストと接触を持つ行為だからであろう。翻訳を論じるということは、そう

した聖なるテキストに触れたことのある翻訳者が自身の経験を語るか、あるいはそれに触れようとする者がおのれの抱負を述べるということであり、それゆえ多くの場合、翻訳者は自身の翻訳への<sup>プレテキスト</sup>前言ないし<sup>ポストファース</sup>後書、注解、解明においておのれの立ち位置を露わにする。

この観点から、ハイデガーとヘルダーリンにおいて翻訳者の形象がどのように思考されていたかを振り返りたい。ヘルダーリンは、例えばソフォクレス翻訳の注解では、オイディプスのような翻訳者ないし解釈者（彼は解釈行為を通じて悲劇的運命を辿る）を明確に形象化する。一方、ピンダロス断片においても、他の断片の読解からも、一貫して翻訳者の構えのようなものが問題とされていることが理解されよう。アジール断片においては、テミスという神格と、その息子とされる人間が翻訳者の形象となっている。テミスは天と地を繋ぐ媒介者であり、翻訳の法であるが、救済者の「娘」となることで自らも保存＝救済の機能を獲得し、安らいの場を産出する。この安らいの場が、こんどは翻訳装置となり、そこで翻訳者としての人間が、自己を保つことに成功する。この保持ゆえにアジールには「余所なるものが入り込まず」、「同じこと」が保存＝救済される。

これに対し、ハイデガーにおいては、ヘルダーリンとは異なり神話的要素の書き換えというスタンスが明確化されていないが、それでもアジール断片で用いる「自己を保つ (sich halten)」と同系列の語彙（とりわけ休止と持続をあらわすInnehalten）が活用され、翻訳の営みが言い表される。ただし、少なくともヘルダーリン講義を読むかぎり、翻訳者の立ち位置・構え

(Haltung) については明言されることがない。その理由としては、ある種の調和的な形姿を伴った「構え」（パイディアやBildungもしくはGestaltung）から「滞在」へ、自由から自由な開かれた場へという移行が介在することを本発表では指摘した。より射程を広げていえば、翻訳における保存＝救済の機能を司るムネメー的なものへの考察が深まったと言えるかもしれない。『イスター講義』の次学期の『パルメニデス講義』では「保管 (Behalten)」と「救済 (Retten)」がセットで用いられる。いずれにせよ、このような構えなしの踏み止まりと救済の場が、ハイデガーにとっては断片だったのである。

だとすれば、断片を翻訳することの意味は一体何だろうか。断片の断片たるゆえんとは何なのか。断片とは、ある全体が破碎した、その破砕片である。したがって断片を翻訳する方法には二つの仕方が存在する。ひとつは破碎する前の全体を再構成する方向で翻訳をおこなうこと。もうひとつは、断片を断片として翻訳すること。前者は解釈学や文献校訂者が行う翻訳とみなすことができるが、問題は後者である。ヘルダーリンの場合、9篇の断片を翻訳するにあたって、完全に孤立した断片を抜粋してきているわけではなく、むしろ、断片同士が互いに参照しあって、より大きな統一を構成している。だがここで、9篇の断片が断片らしく翻訳されるためにはいかにすべきだろうか。それは、その切片を切片のままに翻訳するということによって可能となる。「安らいの場」という訳語の生成に孕まれた緊張を我々は確認したが、これは、翻訳されているテキストが断片であるからこそ生じる緊張である。破砕片とは破壊の後に残った残骸で

ある以上に、その縁辺もまた更なる破碎にさらされている切片なのだ。つまり、断片は壊れやすい (fragil) という本質をもっている。「安らいの場」は、そうした脆い縁辺の上に生じる。そしてここに断片翻訳の意味が込められている。断片の翻訳が断片の翻訳であるということを自己主張することができるのは、その縁辺においてである。アジール断片の翻訳は、この原則に忠実な稀有な例の一つである。ヘルダーリンは、この縁辺において、「安らいの場」という訳語を作り出し、それをアジールと命名した。

ひるがえって、ハイデガーにとって断片の翻訳とは断片の上での踏み止まり (スコレー) であった。これはまさしく歴史的な滞在であり、そうした滞在については次のように言われていた。「真理の本質の変遷に際して、歴史が休止する目立たない、稀な瞬間がある。この休止する瞬間、隠された安らいの瞬間が、原初的に歴史的な瞬間である」(GA 54, p. 81)。歴史の休止は、断片において、部分と全体の解釈学的循環をあふれ出る「関係のみなぎり (das Verhältnis waltet)」(GA 12, p. 142) を生じさせ、自由な交通の場を提供する。ハイデガーがアジールに「場の神聖性」を読み取ろうとしたのは、まさしくそこで救済が思考されていたからである。ハイデガーが後年まで、滞在とは、居住とは、大地の救済であると言い続けたのは、逆に言えば、断片を翻訳するように、大地の断片を断片として救済する——僅かなもの *Gering* と呼ばれる——ことが考えられていたからである。

したがって「断片」は、偉大な哲学者と偉大な詩人との対話の最後の言葉でもなければ、哲学と詩の共通のトポスでもなく、そのつど特異な翻訳者たちを集わせる——アジールを産んだテミスは神々の集いを招集する呼び声を発するという——自由にして新聖なる何処にでもある場の名前となりうるのである。

註

ヘルダーリンからの引用は以下の略号を用いた

StA = Friedrich Hölderlin, *Sämtliche Werke*, » Große Stuttgarter Ausgabe «, hrsg. von Friedrich Beißner und Adolf Beck, Stuttgart, 1943-1985.

FHA = Friedrich Hölderlin, *Sämtliche Werke*, » Frankfurter Ausgabe «, hrsg. von Dietrich E. Sattler, Frankfurt am Main 1975-2001.

ハイデガーの著作は、全集はGA の略号を用いて、その後に巻数と頁数を記した。

全集の著作タイトルは下記の通りである。

GA 4 = *Holzweg*

GA 8 = *Was heißt Denken ?*

GA 12 = *Unterwegs zur Sprache*

GA 34 = *Vom Wesen der Wahrheit. Zu Platons Höhlengleichnis und Theätet*

GA 36/37 = *Sein und Wahrheit*

GA 39 = *Hölderlins Hymnen » Germanien « und » Der Rhein «*

GA 52 = *Hölderlins Hymne » Andenken «*

GA 53 = *Hölderlins Hymne » Der Ister «*

GA 54 = *Parmenides*

GA 56/57 = *Zur Bestimmung der Philosophie*

GA 62 = *Phänomenologische Interpretation ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*

GA 65 = *Beiträge zur Philosophie (Vom Ereignis)*

GA 75 = *Zu Hölderlin. Griechenlandreisen*

Παρεὶ ὧ αὐτῶ, Στρ. ε.

Πίνδαρος δὲ ἀπικρὺς καὶ σωτή-  
ρα Δία συνοικοῦντα Θέμιδι εἰσαγά-  
βαια λεία σωτήρα, δίκαιον ἔρικ-  
νέων ἰσθὲ πῶς, Γρῶτα μὲν ὄβουλον  
Θέμιτι οὐρανίαν χρυσίαισιν ἵπποισιν  
ὠκεανοῦ ὠρεῖ παρὰ μοῖραν ποπ κλι-  
μακα σπικναι ἄρον Ολύμπου, λιπα-  
ραν κάθοδον, ἑστῆρος ἀρχαίαν ἀλο-  
χον Διὸς ἐμμεναι αὐτῆς χρυσάμ-  
πικας ἀγλαοκαρποῖς ἕκαστην ἀγαθὰ  
σωτήρας.

Παρεὶ πῶ αὐτῶ, ἀμαχοῦ.

Ολβίος ὅστις ἰδὼν ἐκείνα κοινὰ  
ἔσπευχε, οἶδεν μὲν βίου τελευτῆν,  
οἶδεν δὲ φιλῶσόν τιν ἀρχαί.

Παρεὶ πῶ αὐτῶ,

Λύπῃ πὶ πῆταται γὰρ ἔσπευχε

Apud eundem, Scrom. lib. 5,

Pindarus autē aperte servato-  
rem etiam Iouē maritum inducit  
Themidis, regem servatorem, iustū  
his utens uerbis, Primum quidē con-  
silio ualentem Themim caelestem,  
aureis equabus ad Oceani rupem  
Parcae ad augustam Olympi sca-  
lam duxerunt, splendidum adi-  
tum, ut esset antiqua servatoris cō-  
iux. Illa autem aurea redimita  
gestantes ἔσπευχε praeclarum fructum  
ferentes peperit bonas Horas.

In hac interpretatione pro α-  
γαθὰ σωτήρας lego ἀμαχοῦ  
ὠρεῖ. Sed & alia quadam  
hic deprauata sunt.

Apud eundem, alibi.

Beatus qui intuitus illa commu-  
nia sub terra, nouit quidem uitae  
finem, nouit uerò à Ioue datum im-  
perium.

Apud eundem.

Ipsēque uolat sub terra ἔσπευχε

ΑΛ. iij.